

現場実習

1000時間

地域で「教師力」磨く

島根大教育学部

島根大学教育学部は2004年から、学生に講義以外の「1000時間体験学修」を課している。豊富な現場体験を通じ、地域とともに即戦力の教師を育てる全国初の試みが3年目を迎えて大きな成果をあげており、地域の教育力の重要性に改めて注目が集まっている。

島根大学と鳥取大学は04 ませることが必要だと考
年から、教員養成課程を一 え、教育実習の400時間
本化。山陰地方で唯一の専 を含めて、地域の人々とか
門学部となった。 かわる体験や臨床・カウ
質の高い教員を育てるに セリング体験など計100
は、現場で十分な体験を積 0時間を必修で課すこと
す。

した。

学外での活動は、地域の祭りや福祉施設でのボランティアなど、多様な体験を自ら選ぶ。この中でも、県立松江養護学校の学童クラブには、常時数人の学生が参加。保護者が迎えに来るまでの間、絵本を読んだり、体育館で遊んだりして、子供たちと一緒に過ごす。



松江養護学校の学童クラブで、子供たちと遊ぶ島根大学の学生 (中央)

担当する小学生と体育器具で遊んでいたのは、特別支援教育専攻の3年生、越智大輔さん(20)。「突然走り出したので、目が離せなかった。子供と触れあえる時間は自分にとって大きな財産」と話す。

同専攻3年の川上理恵さん(21)は、女の子のペースを静かに見守っている。地域の人たちと話ができるのも、貴重な体験だ。

学生は、指導員や教師など、周囲の大人にも喜ばれている。保護者の藤原さん(46)は「学生さんたちのことを、お兄さんやお姉さんみたいに親しんでいます」と安心した口ぶり。同養護学校の藤江由紀子教頭(53)も、「教員になる前に経験を重ね、心構えを身につけられるのは素晴らしい」と評価する。

導入当初は「1000時間でもできるのか」との反発が学内からも大きかったという。しかし、高岡信也学部長(53)は「体験をしながらでも、部活動をしたり、アルバイトをしたり、学生生活を充実させる」とはで

きている」と、これまでの実績に自信をみせる。加えて、「体験を通じて、むしろ学生の教員志望意欲が高まっている」と話し、「大学の中だけでは育たない力を、『地域』という外側の社会が育ててくれる。良い教員が育つことで、地域にも還元できる」とより一層、確かな人間理解ができる教員を育てるには、多くの人間と接することが必要。大学の内外で、共に優れた教員を育てるべく、教員養成の重要性が、地域に受け入れられつつあるようだ。